

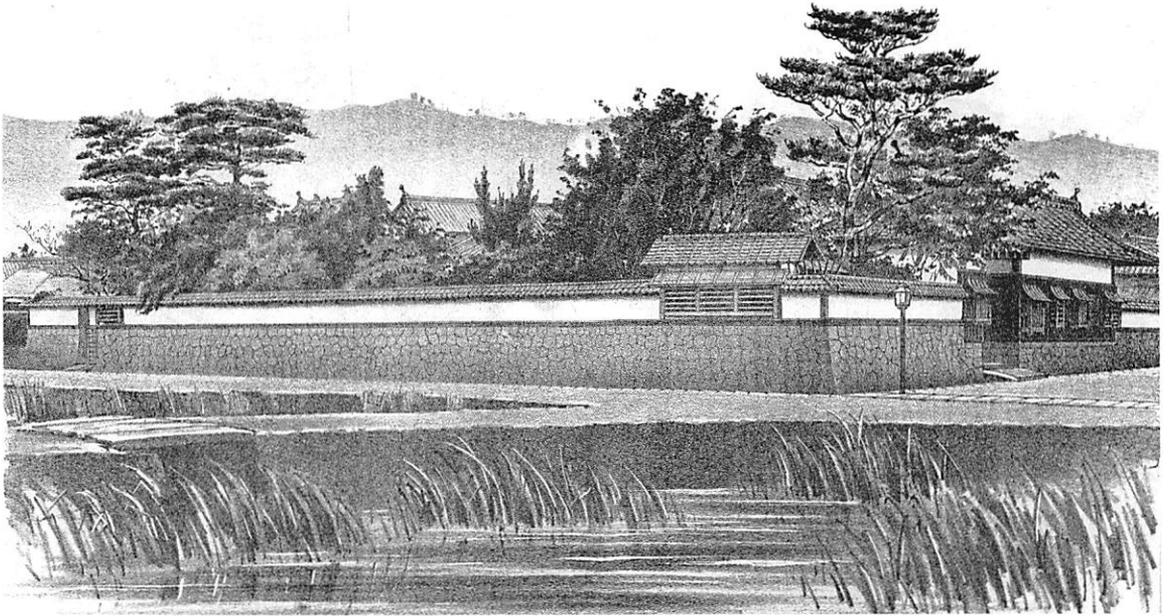
会報

板垣会

第5号



岐阜公園の板垣退助銅像



板垣退助生家と高野寺

明治十年十月、板垣退助は潮江新田に転居した。生家は空き家になり、一時、立志学舎の教場に用いられた。明治十四年四月二十一日の『高知新聞』には、「甲斐源氏の庶流板垣氏の代々居を占し中島丁角邸は、先年立志社の学校となりし処、京町へ転校の後久敷無住たりしが、今般高野山の法主が代価三千円に買求め真言教会所を建立するとかや」との記事がある。これによつて板垣旧邸は買収されて高野寺となり、明治十六年七月十九日、建築落成となつて上棟式が執り行われた。

高知市比島の龍乘院山門は、明治四十二年に高野寺から買い入れた板垣退助生家の門である。



上の旧邸図は明治二十六年刊行の『板垣退助君伝』に収録されており、本号の林一将氏の論文が紹介する地図が示すように、板垣生家西側の辻には水草が生い茂る濠があった様子が描かれている。

乾家と窪川山内家(林氏)について

林 一将

(一) 窪川山内家(林氏)の概要

関ヶ原の役により戦功を挙げた津島守山内一豊公は、徳川家康からその恩賞として土佐二十四万石を領有し、土佐藩主として慶長六年春、入国した。

当時の土佐は長宗我部支配であったが、西軍に屈して国土を没収されたのである。遠州掛川六万石持の城主であったが、抜擢され、側近として仕えていた家臣団を伴い土佐に移封したのである。

掛川衆、尾張衆、播磨衆など地域、時代によつて召しかかえられた重鎮達が入国してきたのである。その数二百余名の家臣たちであった。

一豊公は慶長六年、正月早々、直属の武将と共に入国し、早々と国内治安維持のため、役職配備に当たり、更に領内巡視のため全域を廻つた。城下から出発し、佐川郷一万石を同族の深尾氏に、西に赴き中村郷は弟康豊公に

二万石を与え、更には宿毛領を安東氏に七千石を領有せしめた。

次いで幡多領から、難所である片坂峠を北に窪川、仁井田郷に入り、三十七番札所に一宿、窪川地域は中村、宿毛等の幡多領域への要害地であること、興津、志和等の海岸域の海辺の防備の地、更に上山郷(大正)から下山郷の北幡から伊予国宇和島への要路であることから、朋友として戦陣を共にして来た播磨国の林傳左衛門勝吉に命じ、窪川地位の守護職として、城付家老職とした。

石高は五千石。志和浦代官を兼帯させることにした。

以後、傳左衛門勝吉は、一豊から山内の姓、一の字、土佐柏の家紋まで拝領して山内伊賀守一吉と改名、町内の裏山に古溪城を築城して城下町の形成、領内の開拓に専念。その途次、五十五歳で没した。

以後、第二代は右近勝久が家老職を嗣ぎ、名古屋城、江戸城普請役、或は「大坂冬之陣」



土佐藩家老職窪川山内家墓所(窪川シケクシ林光山墓地)

には佐川深尾和泉の補佐役として参戦、数々の戦功を挙げた。

三代家老職は山内丹波勝政で、豪放な武将として高名で、藩行事には筆頭家老である佐川深尾家、その右備には宿毛の安東家、左備に窪川の山内丹波がこれを勤め、幕府への祝詞奉呈には藩主に代わつて江戸行を命じられている。

第四代は傳左衛門勝定。文武両道にすぐれ「土佐藩奉行職」を拝命するなど、高知城下で日夜藩務に精励した。

更に第五代は大学勝知と称し、幼年で家老職を継いだので、成年に達すると正徳年間には参勤交代の供頭役を命じられ、海路江戸行。任務を終えた後、江戸屋敷で病没し、二十七歳の若さで江戸幡随院に葬られている。

更に、窪川山内家には不幸が重なり、後嗣とされる第六代山内喜兵太勝興は、わずか二歳の幼少で城下住まいで成長を見守っている途中、六歳にて病没という難を受け、当時の土佐藩の掟に従い、「幼少で病没、後継なき家系は断絶」との藩命により初代伊賀守一吉からの土佐藩家老職は召し上げとの沙汰が下され、中老職五百石持として高知城下にて職務することになる。

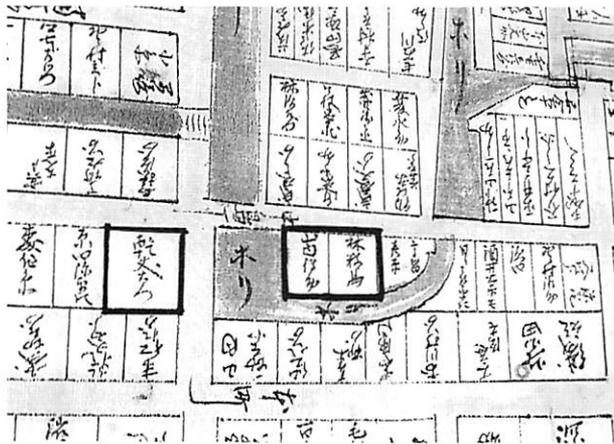
約百二十年間、六代にわたり続いた窪川山内家(林氏)は断絶の運命を辿ることとなる。当主死去という現実にはなす術もなく、栄華を誇った窪川山内家は中老職として格下げに至ったのである。

窪川山内家は、林一族の林九郎丞が「山内長左衛門勝路」として中老職初代となって相続され、城下中島町に邸宅が与えられて命脈が保たれ、藩務に精励した。明治維新まで領知五千石のすべては窪川にあり、その内の五百石を中老職が領有した。

(二)板垣退助の母親は中老職の林吉左衛門勝重の娘

中老となった林家は、窪川の地から城下である中島町に屋敷を構え、二代山内傳鋪勝継、三代林伊三右衛門勝貫、四代林吉左衛門勝重、五代林源藏勝文と明治維新に至る迄、土佐藩主山内家の馬廻格をはじめ、藩の要職に就き、維新後は新政府の要人として採用され、東京に転住した。

その中老職のうち、第四代に山内吉左衛門勝重が就任した。



中老職時代の窪川山内家邸宅と乾家邸宅
(堀を間にして隣同士であった)。

この勝重の三女に「さち」がいた。林家の役邸は城下中島町の堀端にあった。今のNHK高知放送局の所であり広大な屋敷を与えられていたという。

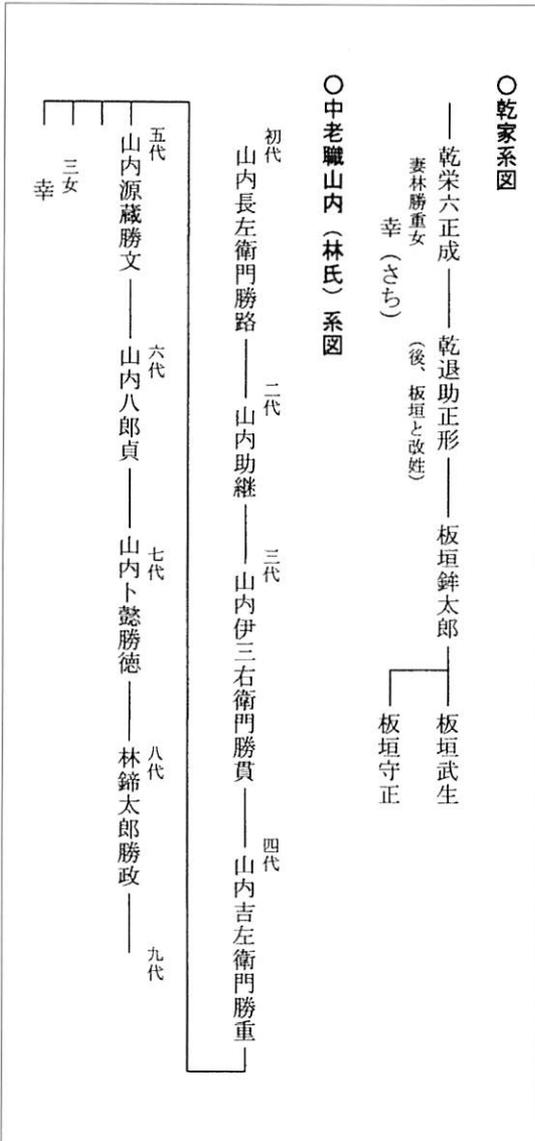
屋敷の東には堀がめぐらされ、その堀を挟んで東隣が馬廻格の乾家の土地、即ち乾家、板垣家の邸宅があった(この板垣家の屋敷には現在高野寺が建立されている)。

当時の乾家は、乾栄六正成が当主として居住していた。この乾栄六は、家系からも甲州武田の名将(乾)板垣駿河守信形の子孫である。

一豊土佐に移封のとき、正信の時代となり、千二百石の領知を有したが、栄六の時代となり、馬廻格三百石の侍であった。栄六は堂々たる体躯で資性温厚、好んで兵書を読み、文武両道に励んだが、十八歳の時、藩主の籠前とは知らずに乗馬のまま馬を走らせたことで精神異常をきたし、家庭でも狂態を顕し、苦悩する日々であった。既に妻帯していたが、離縁していたし、次第に病状悪く、狂態更に進化するに及んでいた。

板垣邸から堀越に見る林勝重屋敷の妙齡で特別美人の娘「さち」の姿を見るにつけ、栄六正成は、その娘を自分の妻に求めたく、林家に申し入れたのである。

この件に関し『明治功臣録』という本には、「板垣退助の母は土佐藩中老職林吉左衛門



勝重の娘なり、林家は元土佐藩の大老なりしが、後故ありて中老職となるも門地すこぶる高く家格の低い板垣に嫁すことは最初から大反対であったが、娘の幸の意志固く、精神病の氣のあつた乾栄六に嫁した」とある。

林家は狂態を演ずる精神異常の男、栄六正成に娘のさちを嫁入りさせることに絶対反対であったが、娘は「士は己を知る者のために死し、女は己を悦ぶ者のために容るもの。たとえ狂人であろうとも思むところはな」と、毅然として強く嫁入りを希望したと伝わっている。

更に『自由の碧血』という冊子にも、「林勝重の三女。乾栄六正成の室となる」との記載がある。旧来の系図では、殆んど妻の名前はな

く、ただ○○の女、又は娘とあり、母は小崎塚平の女と記されている。

乾退助は天保八年(一八三七)四月十七日、藩御馬廻格乾栄六正成を父とし、中老職林吉左衛門勝重の女(俗名幸)を母として土佐国高知城下中島町の自邸で生まれた。

母の「幸」は、乾家に嫁いでも夫・栄六正成の精神状態に変化は見られず、狂態は続いた。暴力を働く栄六に心を痛めたが、乾家繁栄のために尽くし、長男退助が誕生したものである。

子息が生まれても夫の性格、狂態は変わることなく、生涯苦勞の連続であったと伝わって



中老職山内家(林氏)の墓所
高見山頂上付近(パラボナンテナ塔近く)

いる。

人々は土佐小町と呼ばれた。幸の日常をあれんだ。しかし、幸は退助の大家を見込んで寺子屋に通わせ、長男としての習慣を自覚させるなど養育に励んでいたが、不幸にして、退助十三歳のとき病患となり死亡した。

この退助は成長して国を動かす大政治家となった。窪川の谷干城も退助とは同年代の偉人で、双方郷里を同じくするところから親交があり、会津攻めでは志を同じくして行動したが、後年には主義が異なり対立した。土佐の異骨相同士、憂国の士として譲ることなく、双方激情家として今に語り継がれている。

板垣退助の肖像写真

今井 章博

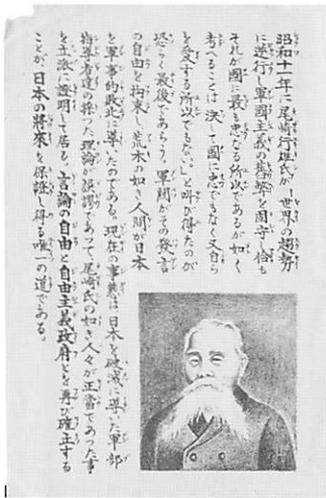
板垣の肖像写真といえはまず頭に浮かぶのが、昭和二八年に発行された百円紙幣。この肖像作成のため、板垣家より最晩年のものと思われる肖像写真が大蔵省印刷局へ貸し出された。紙幣に肖像画が使われるのは、髭や表情を描くために細密な線が必要とし、偽造防止の目的もあり、板垣の肖像はそういう意味では格好の素材でもあった。

←① 板垣が選ばれた理由には諸説あるが、日本の近代史における民主主義の伝統を代表する人物であり、第二次大



戦後「民主主義的伝統の復活」というポツダム宣言の趣旨にも合致する人物として板垣にスポットがあつたということもある。

左は、戦時中にアメリカ軍が飛行機からばら撒いた「伝単」とよばれるもので、紙爆弾の異名がある。表には「日本の偉人よ何処に在りや」の見出しの後、福沢諭吉の説明に続き、刺客に襲われた時、「板垣死すとも自由は死せず」と絶叫した板垣退助氏との説明があり、裏に板垣の肖像から写したと思われるイラストが描かれ、「言論の自由と自由主義政府とを再び確立することが日本の将来を保証



し得る唯一の道である。」と結ばれている。

①の写真とよく似ているのが、右の写真。正面より少し右に振っているが、目は前を見据えている。明治四三年発行の『自由党史』に掲載されているものであり、明治四三年以前の撮影である事が分る。鋭い視線が威厳を感じさせる。板垣自身の監修であり、これが選ばれたものだろう。



時期は不明であるが、密教婦人会発行の絵葉書集「高野寺と板垣

会館」の中に収められている一枚。昭和一二年板垣会館の落成に合わせ、発行されたものだろう。左側から光を当て、鼻筋が通るように



演出されている。

これより少し前に撮影されたと思われるのが、近世名士写真頒布会発行の『近世名士写真』に収められている右の写真。昭和九年から一〇年にかけて発行されたもの。フロックコートの前は開けられており、ほぼ正面向きだが、髭は①より短い。



また、研谷紀夫編『皇族元勳と明治人のアルバム』（吉川弘文館発行）に、写真師丸木利陽が撮影した板垣の肖像が掲載されている。

珍しく左向きで右耳が見えている。その説明には「本写真は明治30年代の撮影であると推定される」とある。そして「本写真は戦後発

行された『百円札』の肖像見本となった写真」とあるが、髭の長さが違うし、フロックコートの前を開けており、明らかに誤り。百円札の方は、ボタンをきっちり留めている。ちなみに昭和小学校蔵の板垣退助肖像は、この写真をもとに製作されているようである。

写真師丸木利陽は、明治一三年に開業し、次第に評判が高まると皇族や華族が利用するようになった。明治二年には、キヨツソネの描いた明治天皇の肖像画を撮影し、御真影



撮影の写真師として地位と名声を得ている。それか

ら遡り、明治二〇年代の撮影とされているのが、右の写真。半身でやや右に視線を向けている。板垣が新潟を訪れた際の写真とされている。境時雄著『明治の写真師』によれば「板垣伯爵が来越されたのは明治二四年で、その折、父（金井弥二）の撮影したものがいたく気に入り、党員に頒つためと七百枚も早急にせかされて、父は大変困惑した」という。金井弥一は、明治12年東京九段坂の鈴木写真館（鈴木真一）に入門し、明治21年、独立し故郷新潟の新興通で写真館を創業する。



板垣退助肖像（昭和十一年）



そして正面だが、やや右向きの写真。ほぼ同じ時期の撮影と思われるが、高知県立図書館選定発行の絵葉書集「土佐十傑」の内の一枚で、こちらは、五〇銭札のモチーフとなっている。

また、この写真は、右のようなたばこカードにも使用された。明治の中ごろから、たばこ産業は、大都市を中心に、問屋制手工業から、工場制手工業へ、そして、機械制工業へと移行する。生産力が向上すると、たばこ商に資本が蓄積され、近代的な会社形態をとる者も現れるようになる。こうして成長したたばこ商は、より多くの商品を販売するために、あらゆる

媒体を利用して猛烈な宣伝合戦をくり広げた。特に、東京の岩谷商会と京都の村井兄弟商会の宣伝合戦は有名である。

村井吉兵衛の村井兄弟商会は、包装を洋風化し、人気を得ていた。印刷にも技術導入が行われ、当時としては、とても斬新なポスターやたばこカード（おまけとしてパッケージに入れた）を媒体として宣伝活動を行っていた。明治の元勳や日露戦争時には、軍人のたばこカードも登場した。（たばこ塩の博物館「たばこの歴史と文化」参照）

そして、明治十五年頃撮影のものが左。クレジットに遭難時とある。板垣はこの後、後藤象二郎とともに渡欧し、フランスでヴィクトル・ユーゴーと会談した時の模様が明治一八年七月二一日付の『土陽新聞』に挿絵で掲載されている。そこに少し髭を伸ばした板垣が描かれている。この写真は昭和一七年に東京、大日本



（蔵氏三忠川中）伯垣板の時登長遠



皇道奉賛会から発行された『西譜憲政五十年』に掲載されている。

明治一〇年頃の撮影と思われるのが、右の写真。『土陽新聞』明治四三年五月二九日の記事に「明治十年の獄に坐せし当時のものに係り」とある。この写真は、皇居にある宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。明治十二年発行明治天皇御下命「人物写真帖」に収められている。これは、「明治一二年、明治天皇が深く親愛する群臣の肖像写真を座右に備えようと、その蒐集を宮内卿に命じられたことに始まります。そして、宮内省主導のもと、大蔵省印刷局が撮影や写真帖の制作を担当し、この事業は進められました。現存するこの写真帖の総冊数は三九冊、有栖川宮熾仁親王を始め皇族一五方、諸官省の高等官ら四五三二名が収められており、そこには、幕末から明治維新にかけて、改革に奔走し、新政府の成立に尽



力した人物に加え、各分野で日本の近代化を担った人々の姿があります」（「三の丸尚蔵館第61回展覧会開催要領」より）。

板垣は西南戦争が勃発した明治一〇年二月に帰郷しており、この時に撮影されたものと宮内庁の担当に問い合わせたところ、写真台紙の裏の記載により、北庭筑波という写真師の撮影であることが分かった。北庭は、明治四年浅草花屋敷に写真館を開いており、東京で撮影されたものであることが判明した。

この前後と思われるのが、右の写真。ちょうど上向き加減で、顎が強調されている。このこ



ろから写真が大量に焼かれ、プロマイドのように求められた。楕円

にトリミングされているのは、当時、折帖形式の台帳があり、その台紙が楕円に切り取られそこにはめ込むようになっていた。

大量に焼くために原版を接写し、右のようなガラス湿板が作られた。ガラス湿板は、下に黒い台紙を置くと白黒反転し、ネガがポジとなる。裏を見ると鉛筆で顔の影をなくすための修正が施されている。当時使用されていた写真の台紙は鶏卵紙といわれるもので、卵の白身で紙の表面に塗布膜を作り、それに硝酸銀を反応させて感光層にするそうである。塗布膜を作ることにより細部まで表現でき、また、ガラス湿板との相性も良かった。

着用しているシャツはウイングカラーであろうか。襟が首回りを包むように立ち上がり、先だけが前に折り返されたものがウイングカラー。その折り返された形が鳥の翼のように見えるため「ウイング」の名が付いた。

そして、戊辰戦争の頃の撮影と思われるのが左の写真。



着用している軍服は通称肋骨服とよばれるもので、

一七世紀の後半、勇猛なハンガリーやポーランド

下騎兵の民族服であったものが、中部ヨーロッパへ広がり、胸に飾りひもをつけるようになった。板垣は元治二年一月、大監察を辞し、騎兵修業等のため、江戸へ出る。騎兵の学はオランダ式であったという。

以上見てきたように、板垣は、明治天皇はじめ庶民に至るまで広く愛され、その肖像写真も時代を追って多く流布している。

板垣退助謫居の地が判明

たつきよ



青年時代の板垣が4年間謫居生活を送った所

謫居地を確定

安政三（一八五六）年八月、二十歳の乾退助は「不作法の挙動」によって城下ならびに四ヶ村禁足の処分を受け、安政六（一八五九）年五月に許されて中島町の実家へ帰るまで足掛け四年間、神田村で謫居の日々を送った。その場所は不明のままだったが、昭和八年十一月の土陽新聞がこれを確定する記事を掲載し、原紙は戦災で失われたものの、幸運にも『土佐史談』四十五号が転載していたのである。

そこで六月五日、すでに一定の見込みをつけていた当会理事の谷是氏と一緒に現地を訪ね、それが高知市神田七八〇番地三であるこ

公文 豪

とを確定するに至つた。

参考のため、「川村理誌」(筆名)という人物の書いた「板伯謫居の地と岩崎弥太郎閑居の地」と題する記事全文を紹介しておこう。

板垣伯が少壮にして江戸勤番を命ぜられ任滿ちて帰り会々事を以つて同輩を侮辱し罪せられて城南神田村に謫居されたのは世人の知る所であるが、余は本月六日その謫居の地をさぐらんとして神田村吉野にいたり古老吉本翁(九十四歳)に面会し、その宅趾が同村本村故渋川萬次氏方の隣なりしを聞き、同氏の息林太郎氏につき当時の逸話等を聴取することを得た、板垣さんが神田へ来られたのは二十歳の頃で、今宮地兼造氏の居宅のある所である、その頃盛組の隊長であり他の組と衝突するなど放縦不羈であつたといふ、ある時同輩の所へ棺を擔ぎ込ませしめ罪せられて謫居すること四年、庭前に土俵を築かせ土地の若者を集め盛んに相撲を取らせたもので自身も相撲を取つた、或る時隣家渋川萬次が麦の秋で多忙を極めていると、板垣さんが「手伝つてやる」といはれたので、萬次が「麦扱きはハシカイものでありますからお止めなされ」と言ふと、「ハシカイとは、どんなものか」と平気で手伝ひ間もなく、「首のあたりが痒ゆくゝなつた」と言はれるので、「それがハシカイと申すもので

あります」と答へると、アソーカ是がハシカイか」と笑はれ直ぐ風呂を沸かさせたといふはなしがある、また板垣さんは山川の狐を好まれたが水田では鴨や小鳥の獲物が多かつたと言ふ、当時の家は建てかへられているが、元の家は四疊半、三疊二間、二疊の玄関に台所位のもので、邸内にあつたと言ふ四尺廻りのオガタマの老木は、今なほ當時を物語るものがあり、転た懐古の感にたへず低徊これを久しくした、先年老伯帰郷の際、鴨田小学校に立ち寄られた渋川萬次夫妻を招き旧事を語り興ぜられたとのことである、板垣伯謫居の所より西南約一丁の宮地藤馬氏の宅は岩崎弥太郎氏閑居の跡である、これも当時の家は建て替えられてある、弥太郎氏ゆえあり郡奉行より罪を得て居村および城下周囲四ヶ村に住居を禁ぜられ、この地に閑居し日夜読書に耽つていた時に、前参政吉田東洋罪あり長浜村に謫居するや、弥太郎もその謫居を叩いて教へを乞ひ意氣投合する所あり、東洋罪を許され再び参政に復するや弥太郎も罪を許され、藩命を以て長崎に派せられたといふ、閑居中の逸話としては残つていない、この両脚趾は余り人が知らぬやうである、これは名士の史跡とし地元等において標石でも建て表示されたいものである。

(昭和八年十一月十六日付け土陽新聞)

文中「先年老伯帰郷の際、鴨田小学校に立ち寄られ渋川萬次夫妻を招き旧事を語り興ぜられた」とあるのは明治四十年のことで、同年三月十八日、帰郷した板垣は鴨田小学校で社会改良につき二時間におよぶ演説をした。これを伝えた翌日の土陽新聞には、「此日伯の旧知行所の農夫宮崎万次(八十歳)夫妻相携へて伯に謁し謫居中の懐旧談ありしが伯は殊の外興味を感ぜられしもの、如かりき」とある。「宮地万次」は「渋川万次」の誤記で、隣り合つた「宮地」と「渋川」の両家を記者が混同したものだらう。

記事にあるように、退助が謫居していたのは神田村本村である。宮地、渋川両家はいまでも隣同士で、それぞれの家には、退助謫居のこゝと、退助が本村の青年を集めて相撲を取らせたと、馬小屋の所にあつたオガタマの老木は火災で焼失したことなどが伝えられている。

乱暴狼藉で城下追放

乾退助は、天保八(一八三七)年四月十七日、高知城下中島町で土佐藩馬廻格乾栄六、林幸子の嫡子に生まれた。諱は正形、幼名猪之助、退助は通称で、中年ころ無形と号した。

板垣伝を書いた宇田滄溟によれば、青年時代の退助は「絶えて学問を事とせず、日々鶏

犬を闘はし、角觥^{すもう}を事とし、或は同輩を押し、長上を凌ぎ、師父の言を用ひず、純然たる餓鬼大将」であつた。維新前、廓中の上士の間では、盛組と呼ばれる南組、北組、上組の三派が鼎立してしのぎを削り、とりわけ南組の首領・乾退助の荒武者ぶりは遠近に轟き、みなその威風に恐れられたという。

嘉永五（一八五二）年、十六歳の退助は七十余名の青年を率いて他派と市上に闘い、激烈な争闘を繰り広げた。あまりの騒動に藩庁も放置できず、退助ら首魁三名を検挙して「屹度遠慮」を申しつけた。安政元（一八五四）年から一年間、退助は江戸勤番を勤めたが、帰藩後も乱暴沙汰は止まず、同三年六月九日、今度は「惣領職被召放」の上、城下ならびに四ヶ村禁足という重い処分を受けたのだつた。

二度目の処分の原因は明らかでない。前述の土陽新聞記事には「同輩の所へ棺桶を擔ぎこまし」とあるが、「御侍中先祖書系図牒」には「自宅において退助ら数人が同輩の者へ不作法をはたらいた」とあつて処分理由が食い違ふ。ともあれ、藩庁は度重なる乱暴沙汰に堪忍袋の緒を切つたのである。「城下および四ヶ村」とは、廓中とそれを取り巻く潮江、下知、江ノ口、小高坂の各村を指す。ここへの立ち入り禁止だけでなく、惣領職召放（没収）であるから家督相続の権利も失うことになる。乾



青年時代の岩崎弥太郎が謫居生活を送った所

家してみれば、頭を抱えるほどの重い処分であつた。追放された退助は、乾家代々の知行所、神田村本村に住まいすることになる。

岩崎弥太郎と吉田東洋

謫居中の安政四（一八五七）年初夏の頃、奇遇といふべきか、百餘ほど離れた所へ岩崎弥太郎が移つてきた。弥太郎は安芸郡奉行所謹告事件で投獄され、同年一月二十日に出牢して安芸郡井ノ口村の父の家にお預けの身とな

り、四月に「居村追放ならびに高知城下四ヶ村禁足」の処分を受けて鴨部村へ移つた。暫くして神田村へ移り、十二月二十三日「帰住御免」となるまで同村本村で暮らした。在村中は読書に耽り、のちに海援隊士となる池内蔵太、近藤長次郎に漢学を教えた。弥太郎が閑居した所には、平成十七（二〇〇五）年、有志の手で標識・説明板が建てられている。

一方は度重なる乱暴狼藉で城下を追放された乾家の嫡男、また一方は地下人の身で役人を侮辱して処分された学才。半年ほどの間だが、のちの自由党総理と三菱財閥の祖が、同じ時に同じ所で不遇の身を閉つていたのである。両人の交際を示す当時の資料は皆無だが、僅か二、三十軒の小集落の中で、百餘ばかりの所に居を構えて半年暮らせば、互いに相知る機会が絶無だつたとは到底思えない。

まことにもつて妙な話だが、この時期、退助、弥太郎に加え、吉田東洋も城下及び四ヶ村禁足処分を受けていた。

東洋は、安政元年六月十日夜、江戸藩邸に山内容堂が招いた幕臣・松下嘉兵衛（山内の親戚）の酔狂、無礼に腹を立てて殴りつけ、容堂の怒りをおかして参政職^{ちだう}奪のうえ国に追い戻され、同年八月城下四ヶ村禁足を命ぜられた。そこでいったん朝倉村へ退き、次いで長浜村梶ヶ浦、翌年さらに同村鶴田に移つた。ここで

東洋は小林塾をひらいて経世の術を講じ、後藤象二郎、福岡精馬、野中太内、神山郡廉、岩崎弥太郎、井上佐一郎等、のちに「新オコセ組」と呼ばれるようになる数々の人材を育てた。赦免されたのは同四年十二月。翌五年一月十七日には参政へ返り咲くことになる。

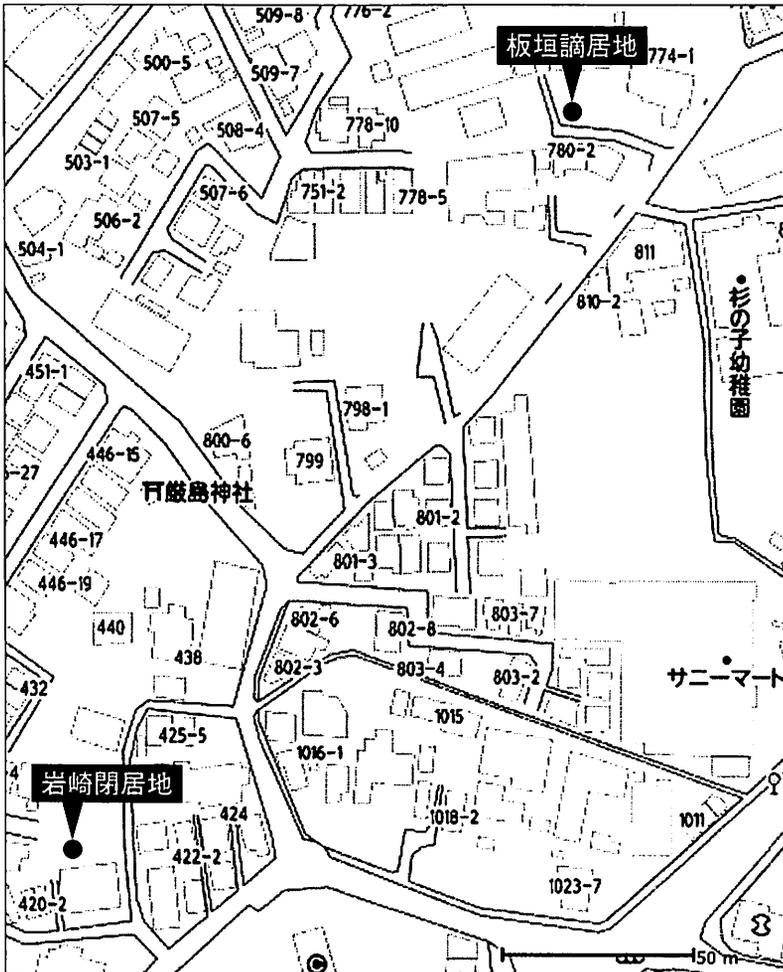
弥太郎が小林塾へ通ったのは赦免後だと母美和が語っている。時期は不明確だが、ともあれ弥太郎は東洋門下となることで出世のチャンスをつかんだ。

一方、東洋は退助の天性の資質、卓越した指導力や人心掌握の才に注目し、後藤や門弟の末松喜久弥を通じて自らの門に就くよう勧めたが退助の返答は一向に要領を得ない。ある時はわざわざ神田に微行してまで「折りがあれば遊びに来い」と誘っている。退助が長浜近傍に遊獵して東洋の家に立ち寄り、夕飯を食わせて読書・講学の必要を説いた。退助は「武士は主君の馬前で討死する覚悟があれば足る」と答えるだけで、ついにその勧説に耳を傾けることはなかった。だが、参政に復帰した東洋の抜擢で赦免後の退助が免奉行に任じ、文武に刻苦するようになったのは、「国家を経綸し、民生を救済するのは、読書講学の力ではなければ不可能」というこの時の東洋の啓発があったからというのが宇田滄溟の評である。

おわりに

冒頭の土陽新聞記事で、退助が麦の脱穀を手伝い、「ハシカイ」ということを初めて知ったという逸話は興味深い。厳然たる身分制度によって人々が分断されていたこの時代、武士の子は二十歳を過ぎてもなお、稲・麦を脱穀すれば「ハシカイ」思いをしなければならないこ

とを知らなかったのである。退助は、城下四ヶ村を追放されて百姓たちと日常的に交わる境遇となつて初めて、ハシカイ思いをして麦を脱穀する百姓の労働を知った。四民平等の思想の種子は、村の青年を集めて相撲を取り、松葉を焚いて農婦と会話する生活の中で、その精神の中に播かれたのである。



高知市神田本村。杉の子幼稚園の西側が板垣謫居地、蔵島神社の南側に岩崎弥太郎閉居地がある。

政治上の自由と社会改良

板垣退助

頃日子が旧長友党员新年宴会の席上に於て為したる演説に關し、新聞紙上兎角の批評を下し、予を以て自から耻づる事を知らざる者なりと為し、政党墮落の端を啓きたるも亦予の罪なるが如くに誣ひ、甚だしきは政治上に於ける自由の意義を誤解して、今日議員品位の失墜を以て、責を予に嫁するに至る。素より事實によりて攻撃を受け、其議論の相容れざるが為めに論駁せらるは、予の大に満足し、謹で其好意を謝する所なりと雖も、たゞ単に道聽途説に基き誤りを伝へて攻撃せらるは、予の甚だ遺憾とする所、畢竟かの演説は酒席に於ける演説の事として、勉めて簡単を旨としたれば或は其間に辭句の足らざるものありて、為めに大方の誤解を招きたるやも未だ知る可からず。果して然らば予は更に前日の趣旨に基き、茲に辭句の足らざる所を補足して以て予の政治上社会上に於ける立場を申明し、重て大方の批判を仰がんと欲する也。

予は旧自由党员新年宴会の演説に於て下の如く言へり。曰く、今日は旧友諸君の新年宴會にして、互に超歳の祝賀を交換する目的

なれば、改めて演説する考も無く、随つて何等の腹案もあらず、而して此超歳を祝すといふに就ても、予の如きは随分無遠慮に長居を為したる者にして、古語にも命長ければ耻多しといへば、これが果して祝すべきものなりや否や。然れ共翻つて思ふに、強ちに命長きを以て耻づべしとすべからざるに似たり。蓋し人間の生涯は恰も太陽の東より出で、西に没するが如く、始め漸々に明を増し後ちまた漸々に暗を加へ行くものにして、血氣の身神を有せる者も、漸々に老ひて齒落ち、眼かすみ、耳また聾するに至る。然れ共人間のこの老衰を以て耻辱と為すべしとせば、小児の無智蒙昧の時代も亦耻辱なりと言はざる可らず。斯の如くんば人間は結局此世に生れざるを以て光榮と為さざる可らず。世間豈斯の如きの理あらんや。思ふに智者は其智を以て社会に尽し、愚者は其愚を以て社会に尽し、童蒙は童蒙を以て、老耄は老耄を以て亦各々社会に尽すべきのみ。何ぞ之を耻づる事を為さん。

扱又近來新聞紙などには、板垣生きて自由は死せりなど放言するものあれども、こは其

新聞紙こそ無智にして、自由の意義を誤解せるものなりと謂はざる可らず。蓋し政治家の指して自由といふは所謂参政の權にして、言を換えふれば即ち命令服従の域を脱して自治の民となるに外ならず。而して我國民は既に参政の權利を得、既に立憲治下の民となりて適當なる機關の下に一國の政務に参与しつゝあり、即ち彼等は法文の上に於て既に自由を得たる者也。たゞこの憲法により、得たる参政の權利を全ふし、政治上の自由を充分に享受すると否とは、國民自動の力に俟たざる可らず。即ち苟くも選挙区民にして政治上の徳義を有し、一たび選出したる議員をば幾度議會の解散せらるゝ事あるも之を選出し、以て飽く迄も其主義政見を貫くの誠心誠意だにあらば、藩閥や若くは其余類の如何に壘を高くして其地位を守るあるも、之を破るに於て何かあらん。今日議員品位の失墜は選挙民の品位失墜の罪のみ。是故に予を以て之を見れば我國民は既に政治上の自由を得たりと雖も未だ之を運用して憲政の美果を収むる能はざるのみ。何ぞ自由存せずと謂はんや、自由は儼然として存せり、たゞ其いまだ専制の陋習を擺脫する能はざるは、國民の無氣無力之をして然らしむるのみ。

蓋し戦を為さんとする者は、先づ敵を知り己を知らざる可らず。而して自己の背後に立つ所の一般人民の力の如何に弱きかを知り、

其選出する所の議員の如何に逆境に処して毅然として立つ能はざるかを知らば是等の弱卒を提げて何を以てか藩閥と戦ふことを得ん。之に加ふるに由来政治界なるものは、名譽の欲、權勢の欲、利祿の欲等最も人欲の集る所に於て、古來水清ければ魚なしといへる如く、之が首領たるものは余りに潔白に過ぐれば却て之を統率する能はず、而して予の如きは政党の首領としては寧ろ潔癖に過ぐるが故に、始め自由党を創立するや、自から後藤象次郎君を推挙して總理の任に當らしめたるも、後藤君は之を諾せず、遂に已むを得ずして總理の任に就けり。

然るに後に至つて自由党は先づ政權を得んと欲するに急にして、随つて小數党を以て満足せず、如何にもして多數を制せんと欲し、潔癖なる予の力を以てしては殆ど之を支持するの難きに至り、予は再び後藤君を起して總理の任を托せんと欲し、交渉する所ありしに、後藤君は其裏を掻いて松方大隈兩君の内閣に投じぬ。然るに其後幸にして伊藤博文君が、板垣の自由主義ならば同意して可也との意を洩すに迫んで、遂に自由党の後身たる憲政党をば伊藤君に譲れり、而して此間に在て最も尽力したるは星亨君なりき。

之を要するに從來の政界に在ては、既に耕し得るだけは之を耕し、たゞ残れるは休職官吏や実業家の方面なるも、これ予の鑑を入るべ

き方面に非ざるが故に、伊藤君を以てせば必ず成功すべきを思ひ、之を譲りたるに果せる哉、爾來此方面の人々の政界に投じ来る者多く、政友会は遂に多數を制する事となれり。

而して世人は自由党が先是伊藤内閣や山縣内閣と提携したるを以て、往々之を非議する者あるも、こは國際上の勢已むを得ざるものあるが爲めに是に至りたるものにして、當時若し自由党が是等の内閣と提携して軍備の擴張を断行するに非ざれば、かの日清日露兩役に於ける大捷は到底之を見ることを得ざりしなるべく、猶此方面に關しては言ふべき事多きも今は之を略すべし。

予は斯の如くにして政界を辭せり。然れ共社會を辭し得べきにあらず。加ふるに、政界を改良して真に憲政の美果を収めんと欲せば、勢ひ其根底に溯りて先づ社會を改良するの必用あり、若し然らずんば、何人をして局に當らしむるも、これ以上政界を善ならしむる事は到底不可能たるを免れず、且つ今日は權利問題既に解決せられて生活問題いまだ解決せられず、法治制裁は整へるも徳義制裁はいまだ整はず、前日に在ては創業の時代に属するが故に勢ひ智育を先にして德育を後にせしも、今日は最早智育にのみ偏すべき時代にあらず、即ち政治の改良成れるも社會の改良は未だ成らざるを以て、吾人の生命は此新らしき方面に向つて之を献ずるの必要あり。即ち

家庭の改良、自治体の改良是也。蓋し今日吾人の享受せる所の文明は皆先人積善の賜にして、吾人は猶之に善を重ねて之を後世子孫に伝ふるの義務あり。これ即ち人道の基礎を為す所の繼續觀念にして、然かも我邦の他國に比して最も香ばしきは其祖先教にあり、此祖先教によりて所謂報本反始の義を拡充し徳義の制裁力を盛ならしめば、實に政界を改善するに止らず、信用を基礎とする所の商業の如き、学校以外の教育即ち社會教育に俟つ所ある教育事業の如き其改善完成を見るに至るべく、一國の干城たる軍人の養成の如きもたゞに營内數年の教育に依頼せず、家庭と社會とに於て徳義廉恥を養ふ事によりて始めて完全なる軍人を出す事を得て、所謂富強の道是に於て備はらん。

今や旧友諸君は各種の方面に於て國家に貢獻せられつゝあり、而してこの社會改良の問題たるや、何人も異議なき所なれば、予は諸君が此問題に留意せられて、旧に依つて互に尽力する所あらんことを希望せざるを得ず。

予の説く所斯の如きのみ。予は重ねて申明す、我國民の既に癡ち得たる自由を全ふするの道は社會の改良を外にして之を得べからざる事を。論者幸に予の趣旨のある所を誤解する勿れ。

〔土陽新聞〕明治四一・二二、一東京朝日新聞二二三

日本初ヴィトン 板垣退助説

9日に「Itagaki」

板垣と後藤は1882年、横浜からフランスの郵船に乗り、香港などを経てパリに到着。その後モロンドンなどを外遊し、翌83年に帰国した。

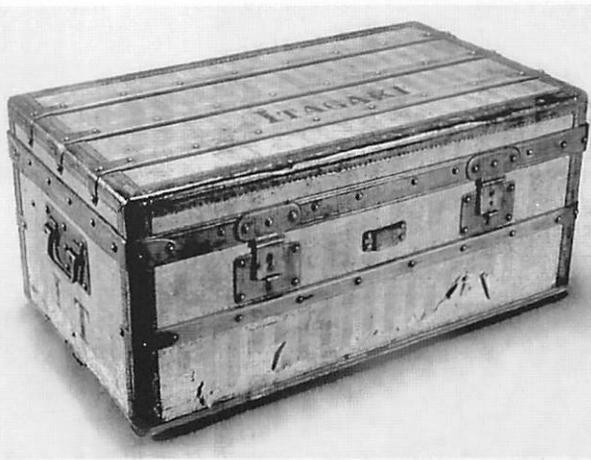


板垣退助

仏高級ブランド「ルイ・ヴィトン」のかばんを日本人で初めて購入したのは誰か……。この謎に高知県はこれまで、土佐藩士だった後藤象二郎と紹介してきたが、さらに3週間早く自由民権運動の指導者、板垣退助が購入していたことが分かった。板垣を顕彰する「板垣会」の公文豪・副理事長(68)がルイ・ヴィトンジャパン(東京都)を通じてパリ本店に照会して判明した。【松原由佳】

後藤象二郎より3週間早く

という人物が、シリアルナンバー「7720」のトランクをパリで購入していることが判明し、このナンバーが、板垣の子孫が保管していたトランクのタグの番号と一致した。この3週間後の同月30日、後藤が二つのトランクを購入した記録があるが、現物が確認されておらず、後藤はこれより前にパリを出発していたという。



板垣退助が購入したルイ・ヴィトンのトランク
高知市立自由民権記念館提供

『毎日新聞』2017年6月30日付朝刊に掲載されました。

板垣会々員募集

年会費 2,000円
板垣退助顕彰に御協力を！
入会は別途振込用紙をご利用
ください。

- 2017年7月16日 発行
- 発行者 古谷 俊夫
- 発行所 高知市本町2-2-31
- 特定非営利活動法人 板垣会
- TEL (0887) 55-2860

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能



ひとときわ輝くおもてなし

高知 サンライズ ホテル

www.kochi-sunrise.com

〒780-0870 高知市本町 2 丁目 2-31 Tel 088-822-1281



明治維新、自由民権運動の主導者としてがんこなまでに民主化を進めた板垣の意思をがんこまんじゅうにたくしました。



高知市本町3丁目4-6
TEL 088-875-2430